

緑のまきば

2022年 No.55

小金井緑町教会

小金井市緑町四・一六・三三

TEL 042・381・7961

牧師 山畑 謙

『スタンド・バイ・ミー』

山畑 謙

説教

2022年度の聖句

「生きてゐるのは
もはやわたしではありません。
キリストがわたしのうちに
生きておられるのです。」（ガラテヤ2章20節）

今年度の聖句を覚えるに当たって、紹介したいものが二つ。

一つ目、『スタンド・バイ・ミー』(Stand by Me) は、1986年公開のアメリカ映画で、原作はモダン・ホラーの大家スティーヴン・キングの非ホラー短編集。4人の少年たちが、列車事故で亡くなった少年の遺体を探して、第一発見者として有名になりたくて、コッソリ自分たちだけで、その現場を確認しに行こうとする物語。4人は、みんな家族関係や、この社会での偏見や差別による痛みと傷を負っていて、屈折したものを持っている。それが時にぶつかり合いながら、それでも、「傍らにいてくれる友」の、かけがえのなき

を知って行く物語。ベン・E・キングの歌が、切なく、心に染みてきます。(ぜひ、聞いてみて下さい。)

もう一つは、最近のアニメ『ヴァイオレット・エヴァー・ガーデン』。不遇な境遇から、幼い時から感情を持つことを許されず、ただ命令に従う機械兵器のような少女が、ある貴族の坊ちゃん(少佐)と出会い、「あいしてる」を知り、人として思いを伝える言葉をつなげていく物語。少佐は、その子に人としての感情を、愛する事を知らせてやりたかった。そして、彼女に「ヴァイオレット」という名を付けた。それなのに、戦場に連れて行き、戦争の道具として使ってしまった。自己矛盾と葛藤を

でも、そんな中で、少佐はヴァイオレットを愛してしまっていた。少佐も、ヴァイオレットも激しい戦いで、重傷を負い、最後に少佐が「あいしてる」とだけ言って、二人とも気を失ってしまう。その後、少佐は死んでしまったと言われたが、ヴァイオレットはその事実を受け入れ難いまま、手紙を代筆する(依頼主の気持ちを伝える手紙を書く)仕事を始める。その仕事を通じて、「あいしてる」とはどういう事か、人の心を少しずつ知る。諦めかけていた時、見えのある筆跡に出会う。そこから、実は生き延びていた少佐にたどり着き、会いに行った。しかし少佐はヴァイオレットを兵器として使い、両腕を失わせ、傷つけてしまった事を悔い、会うことを拒む。彼女は、感謝の手紙を書いた。それを読んだ少佐は、彼女のもとに駆けつけ、言う。

「自分は「君にふさわしくない」と。それでも、今でも、君を愛してる。」

泣きじゃくるヴァイオレット。そんな彼女に、少佐は言った。「そばにいてほしい。ヴァイオレット。」

「そばにいてほしい。」それこそが、『スタンド・バイ・ミー』(Stand by Me) 我らも、まことに愚かで、互いに傷つけ合い、負い目と葛藤を

抱え、相手を拒絶したりする。でも、本当の心は、「そばにいてほしい」のではない。

我らは、愚かさや罪深さの中、孤立し、お手上げ状態になってしまいが、その時、十字架を見上げるよう、復活の主が促す。「見よ、愚かで罪深い君は、あの十字架で私と一緒に十字架に架けられ、処罰されているではないか。」そう言われる主イエスは、どこにいるのかと思うと、何と、私の内にいまし給うではないか。

そうだ、私は、あの十字架上に、主と共に死んだ。今、生きているのは、私ではない。なんと、キリストが私の内に生きていまし給う。何という事か。死んでお終いになるはずのところ、主、イエス様が私の一番近いところ、すなわち私の内にいまして、生きておられ、その故に、私も生かされている。この気付きに、復活の主こそが、導いて下さる。

究極の『スタンド・バイ・ミー』(Stand by Me) は、このガラテヤ書2章20節にある言葉だった。

「最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。」

(文語訳) この言いようのない平安・安堵・喜びを、誰かに伝えられないのではないのか。